

サロン・あべの

<サロン・あべの> NO. 29

昭和63年11月12日(土)発行

自然に学び、自然と親しむ

ハサロン・あべのV十月の出入会い

一ヶ月余りも早い木枯らし第一号が来阪し、気温は平年を六度も下がった昭和六三年十月二十九日ハサロン・あべのVは、あべのボラ
ンティア・ビューロー主催、ボランティアアスクールの講座のひとつ
「みんなで集う交流会——長居公園へ出かけよう！」に参加して長
居植物園で十月のサロンの出合いを持った。

この日参加した人達は、あべのボラ
ンティア・ビューローのボランティア
アスクール受講生、市社会福祉協
会のボランティアアスクール受講生、
阿倍野老人福祉センターのデイケア
を受けておられる老人方とその関係
者、あべのたんぼ作業所の仲間達
と指導員の方々、あべのボランティ
ア・ビューロー関係のボランティア
、そして、ハサロン・あべのVから
参加した一五名を加えて八〇名であ
った。

長居植物園のほぼ中央にある芝生
広場で車座になってなごやかな昼食。

この間、各参加グループの紹介が

昼食後、「宝ものさがし」に出か

あり、ハサロン・あべのVは石田

けた。「自然の宝ものを探しましよ

律氏がユーモアたっぷりに紹介。同

う。危険なものや、自然を壊してし

時に参加者にハサロン・あべのV紙

第二八号を配ってピーアールをした。

まうものは取ってはいけません」と

曇り空とはいえ、時折雲の切れ目

からみえる空は、澄み切った秋の青

（次頁の表）を手に、手動車イスの

空で、木々の紅葉もはじまりかけ、

秋バラの深紅が鮮やかに目に映え、

人、電動車イスの人、目の不自由な

秋を感じさせる。時季はずれの強く

吹く風は冷たく、ちよつと寒かった

人等々みんなで公園内を三三五五

が、人とふれあい、秋冷を満喫しな

のを探して歩いた。

「宝ものリスト」に載っている宝も

が、人とお弁当の味はまた格別で、そ

のを探して歩いた。

のを探して歩いた。

のを探して歩いた。

のを探して歩いた。

のを探して歩いた。

のを探して歩いた。

のを探して歩いた。

のを探して歩いた。

のを探して歩いた。

のを探して歩いた。

のを探して歩いた。

のを探して歩いた。

のを探して歩いた。

のを探して歩いた。

のを探して歩いた。

のを探して歩いた。

のを探して歩いた。

のを探して歩いた。

のを探して歩いた。

のを探して歩いた。



《 宝 も の リ ス ト 》

1. 鳥の羽根 (1本)
2. 植物の種子 (3種類)
3. カエデの葉 (1枚)
4. とげ (1本)
5. 骨 (1本)
6. 保護色の動物または昆虫 (1匹)
7. 何かまんまるいもの (1つ)
8. 卵の一部分
9. 何かケバだったもの (1つ)
10. 毛皮もしくは皮の一部分
11. 動物の住んでいる証拠 (1つ)
12. 何かとがったもの (1つ)
13. 人間が落したゴミ (5つ)
14. 何かきれいなもの (1つ)
15. 自然の中で何の役にも立っていないもの (1つ)
16. 食いあとのある葉 (自分でかじったものはダメ 1枚)
17. 何か音の出るもの (1つ)
18. 自然の中で大切な役割を持っているもの (1つ)
19. とっても柔らかいもの (1つ)
20. 何かあなた自身について考えさせるもの (1つ)
21. 太陽のエネルギーをつかまえるもの (1つ)
22. とにかく自然を感じさせるもの (1つ)
23. 何かいいにおいのするもの (1つ)
24. 自然のかなでる音 (1種類 言葉を使わずジェスチャーであらわす)
25. まっ白いもの (1つ)
26. あなたの笑顔

宝ものさがしをしながらいち園内を散策して自然史博物館に集合し、探した自慢の宝ものを披露。

五番の「骨」で高々とコウモリガサを差し上げ、みんなの爆笑をとる人。

一五番の「自然の中で何の役にも立っていないもの」は何一つないということに、何んとなく安堵してうなづく人。

そして、最後の「あなたの笑顔」の項ではみんなヒト思いう優しい笑顔の温かさが、秋一番の冷え込みの寒さも木枯らし一号もどこかへ吹き飛ばした。

名刺大の台紙に、美しく色付いた枯葉を置いて、好きな言葉や日付けを書き添え、ビニール板で両側から挟み、熱処理をすると、立派なリーフプリントのしおりが出来上がる。瞬間押し花とでもいうのだろうか、密封された枯葉の色は一段と彩やかになる。

仕上がったリーフプリントをお互いに見せ合いながら、歓談の輪が、より一層大きく広がり、優しいふれあいを深めて親しくなった初対面の方々と別れを惜しみながら解散した。



咲きかけた懸崖の菊に見入る

ヒトを思ふ 優しい風。



たのが、皆さんののおかげで念願がかない嬉しく思っております。

木枯らし第一号が吹き、少し寒かったけど、皆さんとお話出来、緑多き広々とした公園の散歩。又、生れて初めて車イスに乗せていただきました。押して下さった玉出の奥さんと、もう一人のボランティアの方（名札が下でみえなかった）有難うございました。五〇歳の私、さぞ重かった事と恐縮しております。頂いた押葉は大事にさせていただきます。

又、次の機会にお目にかゝるのを楽しみにしております。

広がれ。仲間の輪

原田 仁

北風を呼ぶボランティアスクールの交流会が十月二十九日（土）、長居公園で開催されました。この交流会は、あべのボランティア・ビューローのボランティアスクールの中の一つで、これから活動をしていく人たちとの仲間の輪を広げようというところで開かれています。今年をあべのビューローのスクール受講者、大阪市のボランティア

アセンターのスクール受講者、たんぼぼ作業所の仲間、ビューローでボランティアをしている人や依頼している人、そして、サロン・あべのから一五人と総勢八十人以上の人が参加しました。

当日は北風を呼ぶりの名に違わずちょっと寒くなりましたが、午後からは太陽もどき、きれいな青空が広がりました。長居公園の木々も色づき、もうすっかり秋という感じです。

プログラムは、各団体の自己紹介、お弁当のあとちょっと変わった自然の中の宝ものさがしゲームを楽しみました。動物の住んでいる証拠だとか、まんまるいものだとか頭をひねる宝ものばかりでしたが、目を皿のようにして捜していると、普段気にしない昆虫や木の実などを見つけては、ほんの近くの長居公園にも、いろんなものがあるんだなと感心しました。

もう少しみんなで話ができる時間が欲しかったのですが、部屋の中でみるのとまた違うみなさんの姿が見れてよかったです。気がします。

参加者の中からもサロンに来てくれる人がいるんじゃないかなと期待しています。

楽しかった 交流会

松田 峰子

ビューローの前田さん、木村さんはじめボランティアの皆さん、二十九日は大変お世話になり有難う存じました。私は、近くにいなながら（阿倍野区）長居公園へ行った事がなく、一度行きたいと思っております。

連続

入賞おめでとう 第二部

「サロン・あべの」は今号で第二九号を重ね、ことしの第一六回福祉広報紙コンクールでは二年連続優良賞に輝きました。

そこで、今回は本紙の編集に当初より携わり、より親しみやすい紙面作りを目標に、毎回忙しい時間をやりくりしてくださっている石田律氏にお話を伺いました。

聞き手・河合恵子

―― まず、はじめに「サロン・あべの」を発行するきっかけは何だったのですか？

石田 「サロン・あべの」では出会い、ふれあい、助け合いをモットーに毎月一回例会を開いています。こういつた新聞があればもっとその場が広がるのではないかと思っただけです。例会の当日、会が始まる前にこの新聞を手にとられると、はじめて出席されたかたでもうちとけやすくなりますし、あるいは、都合で出席できなかった人にも読

んでいただくことで前回の様子がわかってもらえますしね。

―― 次に、ちよつと硬い話になりませんが、「サロン・あべの」の編集方針は、どういったことですか。

石田 原則として、例会の内容を紹介し、はじめて来られたかた、例会に出れなかった人に、ひと月前はこんなテーマで話がこのように進み、こんな質問がありましたよ、とお知らせすること。そうすることによってサロンの活動をわかっていただき、出会いが適切

れないようにするということです。特に編集面で気を配っていることは……

石田 この種の新聞によくありがちなことですが、焦点のボケたものにはしたくないということです。

―― 具体的にいいいますと……

石田 運営委員会がイニシアティブをとって、一号、一号を筋の通ったものにしていくという姿勢が必要だということですね。だから、依頼原稿も例会のテーマに沿ったものをのせて、例会の報告に幅をもたせるようにしています。

けれども、なんといってもまず、読んでもらえる新聞、ということ、内容と関連記事を手際よくまとめ、それに合ったイラストをのせて視覚誘導をはかりたいと考えています。

―― しかし、編集する立場としてはなんといいかにかに経費をかけないで製作するかどうかというのが腕のみせどころだと思えますが。

石田 そうですね、お金を使わないで作るためにさまざまな工夫をしています。たとえば、原稿は富田さんをはじめめ寄稿するひとに打っていただいています。インスタントレタリングはたいへん便利ですがコストが高いので新聞や雑誌の活字を拾って使用しています



し、写真の掲載も最少限にとどめて
ます。イラストはもっぱら家内製作で
すね。・また、いつも、完全版下で
人稿していますが、これは結構骨が
折れてしんどいことなんですよ、まっ
たくセルフ社から、感謝状を買いた
くらしいですよ。それから、できた新聞
を二つ折りにして製本する。これも手
間がかかりますね。
――原稿を集める方法は。
石田 例会の予定に合わせて関連した
内容で依頼しています。ときには電話

取材で原稿を作成することもありますが、いづれもその窓口に当たってくだ
りさっているのは、運営の中心的存在
であり、また多岐にわたる人脈をもつ
富田さん。とはいえ、突発的な記事が
入れば、塩漬けのきくものはそれなり
に、ということ編集に柔軟性をもた
せています。編集者としては、できれ
ばいつでも取り出して使える内容の原
稿をプールのしておきたいところすね。
連載ものでアカデミックな（知）氏
の原稿については編集を引き受けた時
点で岡知史さんに執筆していただく約
束をとりつけていました。グレイドア
ップのもうひとつの柱ともいうべきT
H E D E A F M U T Eは旭純子さ
んの卒業論文に多少手を加えさせてい
ただいて読みやすくしています。
――レイアウトについてのご苦労は
石田 見やすい、読みやすいがモット
ーです。しかし、ページ毎にのりとハ
サミを用いた手作業ですから、コンピ
ューターを駆使して編集する時代には
逆行した方法ですね。順序を間違えて
はり合わせたり、あるときは切り損ね
て捨ててしまったり、あるいは一行の原稿を
探してゴミ箱をひっくり返して部屋中
に広げてみたり。・
――紙面にはいつも素敵なカットが
花を添えています。これはどなたが



サロン紙に想いを馳せて…

あべのボランティア・ビューロー

前田博子

あれはいつ頃だったかなあ…。「サロン
・あべの」がグループとして独立して、二
三ヶ月もたった頃、広報紙をつくったん
けど、どビューローに持ってきてくれた。そ
れからは、毎月毎月届けられるようになった。
もちろん、今も変わりなく。

連載ものがあって、投稿があって、出会
いの報告があって、読ませる記事がある。

サロン紙はとても豊富な紙面構成だ。私は、
いつも通勤電車の中で、ゆっくりと読ませ
てもらっている。サロン活動の発展と共に、
紙面のふくらみも目に見えてくる。それか
ら、読者数の増加も発展の大きなバロメー
ターになっているようだ。

サロン活動を支える大きな二本柱の一つ
がリ出会いの開催。そして、もう一つが
広報紙の発行なのだと思う。ゆったりとし
た動きだけれど、着実に歩をすすめるサロ
ン活動に、そして、それを支えるサロン紙
に心から声援を送りたいと思う。

描かれるのですか

石田 わたしの女房がイラストを描いてくれたのですが眼を患ってからは二人のこどもが協力してくれています。三人いづれも雰囲気の違いで記事との兼ね合いを考えて使いわけています。記事内容と合いませんが、絵はなつてしまわないように心がけています。

THE DEAF MUTEではその月々の花や草木を添えて柔らかさもたせるようにしています。しかし、どのイラストも描き貯めておくことは

なかなかできないのでたいへんです。

また、思いどおりのものが伝わらないような時は困りますね。たいていのイラストは縮尺してのせていますので原画とはイメージの異なることもしばしばあります。第二七号のコスモスは葉の感じがなかなかなくて五回ぐらいやり直しました。

ーでは、最後にこれからの抱負についてどのようにお考えですか。

石田 やはり、読ませる新聞、サロンだからこそ出せる新聞を目指したいですね。



・後記 石田さんのお話で「サロン・あべの」の製作の手順はだいたいわかっていただけであるうが、実際は手間と時間のかかる、根気のいる作業の連続。この編集を初回より引き受けてくださった石田さんをはじめ、この機関紙をもちたててくださったすべてのの方々へ感謝するとともに、これからの「サロン・あべの」の充実をますます期待したい。 ・河合恵子

ひとを救うもの

ぼくはいま社会福祉を自分の仕事としているのだが、そのきっかけとなったのが、大学時代のボランティア活動だった。そして、そのボランティア活動をどうして始めようという気になったのかというと、夕刊に載った小さな新聞記事を読んだことが、そもそもその出発点になっている。

その新聞記事というのは、ひとり娘に嫁がれてしまい、ひとり家に残された父親がさびしさのあまり自殺した、というものだった。

それは、ぼくに強烈な印象を与えた。もう九年も前のことなのだが、その記事の見出しもはっきりと覚えている。「孤独苦に自殺」というものだった。「ああ、人間は孤独によって死ぬものなんだ。「孤独苦」というものがあって、それは人間を殺してしまうほど強いものなんだ」と思った。

ぼくがそれまで考えていた「人間」というものは、もつと「強い」ものであった。「努力して、知識を得て、考え、訓練を受け、自分自身を高めていく存在」というイメージがあった。人間はひとりひとり独立して、競争しあい、自分をより素晴らしいものにしていくように努力していくものだと思っていた。

それが、その記事を見たとき「そうで

はない』と思った。山の奥深くに岩があったとすると、その岩は雨や風や熱に長いあいだ晒(さら)されなにかぎり崩れないものである。しかし、人間は、山の奥深くに独り残されると、ぱっくりと内部から崩れてしまう。外から何の力を加えなくても、ぱっくりと二つに割れて壊(こわ)れてしまう。人間というのは、それほど脆(もろ)いものなのだ。

『孤独』ということだけで人間は死んでしまうのである。『孤独』によつて死んでしまふような人間がいるとしたら、その人は、誰かが横にいるということだけで救われる。横にいて話を聞いてくれる、横にいて自分に声をかけてくれる、横にいて顔をのぞきこんでくれる、そういうことだけで孤独な人間は救われるのである。

あの小さな新聞記事が、ぼくの人生を変えてしまうほどに大きな力を持ちえたのは、ぼく自身も孤独であったからだ。ぼくは、あのころ、ぼく自身を救うために、あらゆる本を読んでいた。人類の偉大な思想、偉大な科学、偉大な宗教が、ぼくを救うのだと思つていた。しかし、そうではなかった。

『孤独苦』で死んだ老人は、ぼく自身でもあったのだ。ぼくはそれほど孤独だった。しかし、それをどうしても認めたくなかった。『自分の周りに人がいない』というただそれだけのことで、自分がこれほど

苦しんでいるとは信じたくなかった。人間はもつと『強い』ものだと思ひたかつた。自分自身を高め、自分自身をみがき、自分自身を大切にしていくながら、自分が大事だと信じていた。しかし、そうではなかつたのだ。

人間は『独りにされる』というただそれだけのことで死んでしまう。昆虫は虫カゴのなかにエサさえあれば何日でも生きていけるのかもしれないが、人間はそういうものではないのである。

ぼくはそう考へて、ボランテニア活動を始めた。そして障害児の施設に通いはじめた。ある日、小学二年生ぐらゐの、ほとんど口のきけない、歩くのもとても不自由な男の子が、ぼくのところへ来て、そつとその手をぼくの手に重ねてきた。すると不思議なことに、ぼくの全身をおおい、ぼく自身を締めつけていた重い何か風のように消えていったのである。

貧(むさぼ)るように読んだ哲学の思想も、宗教の教理も、心理学の理論も、ぼくを救わなかつた。それなのに、こんな小さな子の、こんな小さな行為がぼくを一瞬にして救つてしまつたのだ。

イエスが、荒野の采(さい)てに捨てられた病の人びとを、手を置ただけで救われたという話をぼくは信じている。ぼく自身もまた、手を置ただけで救われた人間のひとりだったのである。

(知)

お知らせ

△サロン・あべのV十二月の出会い

日時 昭和六十三年十二月三日(土)

午後一時～四時

場所 育徳コミュニティセンター二階

研修室(阪南町五丁目十五―二八)

スロープ、車イストイレ有り

内容 ときめきのクリスマス

(手話通訳有り)

会費 一人 一〇〇〇円と、プレゼント

五〇〇円程度の品ご用意下さい。

申込み締切日 十一月二十五日

申込み先 電話〇六一六九一一〇二八

富田慶子迄

日々のよろこび添えて

△サロン・あべのVに贈るリ灯饰

十月のカンパ合計 五〇〇〇円

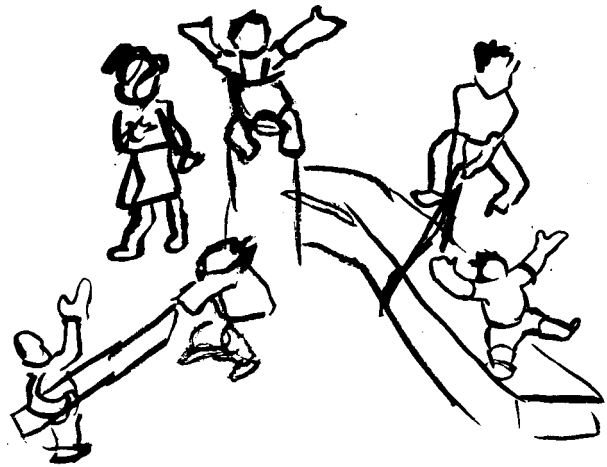
ありがとうございました。

なんとか してやらは

旭 純子

車イスを押して街に出ると、本当に「なんとかしてやらは」と叫びたくなること、閉口させられるのはいつものことですが、その他にも、かまぼこ状に傾斜した歩道、歩道のご真中に立っている電柱など、物理的な面での「なんとかしてやらは」は数えあげればきりがありません。

先日も天王寺へ行ったのですが、車イスを押して歩くと本当に不便な所だと実感しました。というのは、天王寺駅北口から市大病院方向へ行くのに、横断歩道が実に遠いのです。ふつうに歩いていたら時には、歩道橋を使うので気づかなかったけれど車イスで渡るとなると、北口から外をぐるりと



まわってバス停前を通り、東口の前からいったん近鉄側へ渡って、そこから又横断歩道を渡る……めざす建物はすぐ前にあるのに、車イスを押してぐるっとひとまわりなんて、時間も労力も損じた気分です。歩道橋を整備するのはいいけれど、同じならスロープつきにでもしてもらいたいものです。それから、外出すると必ずといっていいほど不愉快な思いをさせられるのは、やはり周囲の人達の心ない言葉です。

ある日、ろう重複女性の車イスを押して本屋さんで買い物をして支払いの時、レジのおじさんが、いちどきっちりとかれた釣り銭に追加して「かわいそうやから エエわ」と云って彼女の手に五〇円をにぎらせました。その時、私は何だか情けない気持ちになって「障害のある人を思いやって下さるのなら、お気持はうれしいのですが、こういう形ではなくて、例えば通路を広くするとか、本を安心して買いに来られるような工夫をしていただけませんか？」と話しました。こういう場合は相手の方が親切のつもりでおられるだけに、こちらとしても対処に困ってしまいます。そして、そのいきさつをその場では理解できない彼女に、あとでどんなに説明しにくかったか、云うまでもありません。又、別の日、彼女との外出で遠う本屋の通路を押して本を捜していた時のこと、初老の男性が一言「こんなせまいところへ来んでもエエんや！」車イスでは本も選べないのでしょうか？ 私にはその言葉をあえて彼女に翻訳する勇氣はありませんでした。

そして、ストローを使えないCPの人の車イスを押して公園へ行った時のこと、彼

は幼児用の把手つき補乳びんを使って飲むのですが、いつものようにジュースを飲んでいたら、三、四人の若いサラリーマンのグループのひとりが通りすがりざま、ふき出し笑いと共に「オギヤァー オギヤァー 赤ちゃんみたいや」と云って通っていったのです。言葉の出ない彼がいつもの文字板につづることもせず、じっと下を向いて控えていた悔しそうな表情に、思わず私まで泣き出しそうになってしまいました。

ハンディを持った人達が街に出易くなつたとはいえ、やはり街に出れば、心を傷つけられるような不愉快なことはたくさんあります。それは一般の人達がまだ障害の問題に対する理解が不十分であることからくるのであって、決して悪気ではないと思いたいのですが…。

こういう言葉の暴力は外出の楽しみを半減させてしまえばかりか、深く心を傷つけられることにもなります。

私たち自身が理解を深めてもらうような啓発をしていく必要もあるとは思いますが（現に努力はしているつもりですが）、本当に「なんとかしてエくなあ」と云いたくなりますね。

THE DEAF MUTE

19

旭 純子



ろうあ運動の歩み（一）

ろうあ運動の全国的な歩みはその発展を次の三段階に分けて考えることができる。

- ・戦前
- ・戦後から昭和三十年代
- ・昭和四十年代以後

一、戦前のろうあ運動

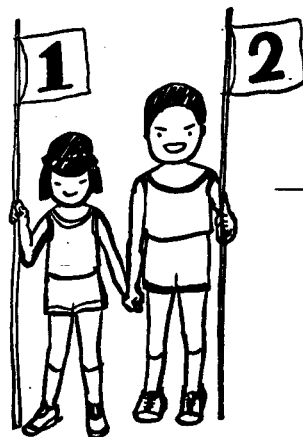
明治四十一年に東京で開催された「聾啞教育講演会」を契機にろう団体結成の動きが強まり、大正四年、「日本聾啞協会」が設立された。ろうあ運動の誕主期である。「日本聾啞協会」は大正十四年、「社団法人日本聾啞協会」となるが、この時期のろう運動の特色は、ろう学校との密接なつながりのも

とに、ろう学校教師とろうあ者という縦の関係と、親睦、スポーツの集いなどによる横の関係作りが開始し、「ろうあ者主体の運動」とは言いがたい内容であった。やがて戦時色の濃くなる時代を迎えると、「社団法人日本聾啞協会」は「財団法人日本聾啞教育福祉協会」に統合されて、その活動は立消えとなった。

二、戦後から昭和三十年代のろうあ運動

昭和二十二年、ろうあ運動の復活を期して「全日本聾啞連盟」が設立され、翌年、「第一回全国ろうあ者大会」が京都において開かれた。この連盟は昭和二十五年に財団法人となり、現在に至っている。その活動の舞台は設立当初、大阪であったが、昭和三十九年に国立聴力言語生涯センターが建設され、四十年にベル福祉会館が完成したのを機に東京に移った。

この時期のろうあ運動は「ろうあ者の福祉はろうあ者の手で」という基本理念に基づき、ろう学校教師（健聴者）からの支配を避け、「ろうあ者主体のろうあ運動」を指向したが、上層幹部の指導力と政治力に頼る面が大きく、ろうあ者の真の要求実現を図るには組織化という面で不十分であったといえよう。



第二四回全国身体障害者スポーツ大会

(愛とふれあいの京都大会)は一〇月二九日・三〇日、京都市右京区の西京極総合運動公園を主会場に開かれました。全国から史上最高の選手、役員計二、一〇〇人が参加、熱戦を繰り広げるとともに、交流とふれあいの輪を広げました。

みなさんの熱烈な応援のお陰で、心配したキンチョウもさほどなく、思う存分の競技が出来、スラロームの部で「金」を取ることが出来ました。

一段高いところへ上った気持はえもいえぬものでした。

つぎに「私の国体」を書く人がサロン・あべのから出ることを祈って稿を終えます。

(談)

編集後記

とうとうインタビューされてしまいました。昨年、入賞したときからいわれつづけ、そのたびに、断りつづけて来たのですが・・・

編集子は黒衣であって、表だって舞台に出るものではない。舞台に黒衣がベロッと顔を出したところを、想像しただけでも滑稽でしょう。芝居になりません。舞台上演する役者の後に控えて後見するのが黒衣。それで芝居はうまくいくのです。新聞作りもいっしょです。編集子がシャシャリ出るものではありません。今回は2度目の受賞ということもあり、ムリヤリでしたが、これっきりにしたいので、「ブン(新聞)作り、ブン見るときは陰の人」でおります。(石)

<サロン・あべの>第29号

発行日 昭和63年11月12日(土)

発行・編集<サロン・あべの>運営委員会

[大阪市阿倍野区阪南町6-3-26

電話(06)691-1028 福田慶子]

印刷 セルフ社 電話(06)652-0337

[阿倍野区阿倍野筋4-18-19]

定価 ¥60.

どうすれば

住みやすい、大阪らしいまちに

まちづくりシンポジウム

原田 仁

大阪市総合計画というのをご存知ですか。大阪市では一九九〇年を目標にしたまちづくりのための総合計画づくりに取組んでいます。その一環として十月二十四日に「まちづくりシンポジウム」(世紀の大阪を考える)が開かれましたので参加しました。

シンポジウムでは「人間主体のまち大阪」「世界に貢献するまち大阪」のテーマで、

どうやって大阪に住みやすいまちにするか、どうしたら大阪らしいまちができるか、さまざまな意見が出されました。総合計画はこれからの大阪府をどうするかの基本を決める計画です。市としてもできるだけ市民の意見をとり入れてより良い計画にしたいと考えているようです。サロン・あべのでもサロン紙の「なんとかしてえくな」などで日常生活の問題をとり上げていますが、そうした身近な問題も計画に入れていくよう、積極的にとり組んでいきたいと思えます。どうぞ、ご意見を聞かせて下さい。